



伊勢原の民話紙芝居

『日向薬師の大太鼓』を語る

監修：伊勢原市教育部社会教育課



渡部美幸さん



山中真理子さん



酒井道子さん



I 紙芝居3部作では、この『日向薬師の大太鼓』が最初の作品ですね。

山中「ええ、そうなんです」

I どうして『日向薬師の大太鼓』の紙芝居を作ろうと思ったのですか？


山中「おはなしばる〜んで活動を始めて、3年くらい経った頃、伊勢原の民話をおはなし会に入れられないか、ばる〜んのメンバーで資料を調べたことがあるんです」

そこから作り始めたのですか？

I 山中「いいえ、その時はできなかったんですが、10年後くらいに「かながわのむかしばなし50選」という本を読み返す機会があり、その本にあった『日向薬師の大太鼓』の話を、高部屋小学校で読むことができて」

それは、おはなしばる〜んとしてですか？

I 山中「はい。ばる〜んの出張講演でした」

 その時は、本の読み聞かせをしたのですか？

山中「その時は、OHPで絵を4～5枚映しながらお話を read だんです。物語を読みながら、日向薬師で鳴らした太鼓が、平塚の須賀まで届いたなんてと。自分の頭の中にも、当時の田畑や荒地の広がる静かな相模の国を、大山の山風に乗って太鼓が鳴り響く様子が広がって」

 その様子を紙芝居で表現してみたくなると。


山中「はい。そうですね」



 具体的に紙芝居の企画ができたのはいつ頃ですか？

山中「2005年の秋に、伊勢原の民話の紙芝居委員会を立ち上げて」

酒井「まだ、いろいろわからないことが多くて、手探り状態でしたね」

 製作費とかはどうされたんですか？

渡部「当時、かながわボランティア活動奨励賞をいただいていた、その副賞でいただいた賞金を使いました」




 紙芝居を製作するのに苦労したことはありますか？

山中「苦労というか、いろいろな方の協力を得られて完成したという気がします。

当時の市の文化財課や図書館の職員の方にもご協力いただいて」

酒井「現地の見学や、郷土史の勉強もしましたね」

山中「作画を担当された高橋正雄さんは、当時の姿を描くために、時代考証等いろいろ苦労されて、約2年程かけて描き上げてくださいました」

 製作過程で特に記憶に残っていることはありますか？

山中「脚本を書くなかで、セリフは標準語でない方が良いとアドバイスをいただき、伊勢原の土地言葉や平塚須賀の言葉を調べたり、資料を提供いただきながら直しました」

酒井「紙芝居は耳で物語を楽しむものですから」

山中「(うなずきながら) 何度も読んで、耳で聞き、ひっかかるところがないか、分かりにくいかなど確かめながら脚本を完成させました」

 紙芝居の見所はどこですか？

山中「実は製作の途中、偶然、世田谷のボロ市で、代官屋敷の郷土史研究会が作った大山道の古地図が手に入ったんです。その時、大太鼓の内側に書かれていた張替え銘に、江戸に出開帳に行っていたことが記されていると聞いていたことを思い出して。当時、大太鼓が江戸に運ばれて、その大きさと人々を驚かせて帰ってきた場面を加えたんです」

渡部「大太鼓の旅の物語としても楽しんでいただければと思います」


酒井「大太鼓の木枠は、今も日向薬師に残っているんですよ」

 最後に、3部作の第一作目を製作されたことについて。

酒井「いろいろ苦労はありましたが、完成できて」

渡部「楽しかったですね。いろいろな方にお世話になり、いろいろな方と会うこともできましたし」

山中「大太鼓の旅を描くことで、わたしたちも紙芝居の製作という旅をしてきた気がします。ひとつのお話に、あんなにじっくりと向き合うことができたのは、本当によかったです」

 貴重なお話をありがとうございました。

【敬称略】



※参考：『かながわのむかしばなし50選』

著・編／神奈川県教育庁文化財保護課 出版社／神奈川合同出版 出版年／1983年